

---

# そっくりなロボット

豊富銭平

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

そっくりなロボット

### 【Nコード】

N8625N

### 【作者名】

豊富銭平

### 【あらすじ】

博士が造ったのは、自分にそっくりなロボット。

外見だけでなく、知能から行動パターンまでそっくり。

しかし、そのうちロボットの方が博士より優秀になり、友達にももてはやされたとき、博士はある行動にでた…。

**(前書き)**

この作品は私が2年ほど前に別の名義で発表した作品です。  
退会して消えたのでもう一度投稿します。

博士は2年間もの歳月を費やしようやく完成したロボットを見て、  
気味悪さを覚えた。まるで自分のクローンが現れたかのようだ。

潔癖症とよばれるほどに几帳面で完璧主義の博士は、特にロボットの外見にこだわった。昔のおもちゃであつたねじ巻き式ブリキロボットのよつなものは時代遅れだし、宇宙飛行士のような近代的ロボットも既に存在している。

どうせだから、まるつきり人間にしてみたらどうだろうかと思いついたものの、もしもロボットと似た外見の人がいたら裁判沙汰になつてしまふ。

そこで博士は、いたずら心もはたらいで自分とそっくりなロボットを作つた。まるで鏡を見ているかのようだつた。

若干、天然パーマのようになくねつとした髪の毛。そのなかには最近現れてきた白髪まである。アーモンドのような形の目も、ツンとした鼻も、全体的に“痩せすぎ”とまで言われるシャープな輪郭まで忠実以上に再現されている。

だから、博士の鼻の周りにある毛穴の黒ずみもないし、眼鏡もかけていないし、表情を全く崩さないだけに博士よりハンサムに見える。それでも、額がぶつかり合うほど近くで見なければ区別はつかないぐらいにそっくりだつた。

「さて、見た目は完璧だが、正確に機能するだろうか」

どんなに本人と見分けがつかないくらい洗練された外見でも、動かなければそれはただの人形である。

とにかく基礎データとして入力した『人の命令に絶対従ふこと』『人に親切すべし』『親切にされたら恩返しをすべし』という、この三か条さえ守ってくれるなら上出来といえるだろう。

「何か喋ってみてくれ」

「何を喋ればよいのでしょうか」

と、ロボットが博士の声で返してきた。成功だ。博士は高揚した気分で片付けにとりかかった。

「何を喋ればよいのでしょうか」

ロボットはしつこく尋ねてくる。これは博士の完璧主義な部分が伝染しているのか、電子機械特有のものなのかは分からないが、邪魔なだけだ。

「何でもいいよ。静かにしていてくれ」

「何を喋ればよいのでしょうか」

これでは頭が良いのかバカなのか、まるでわからない。

「こんにちは、と言え」

博士はイライラしながら教えた。

「こんにちは」

ロボットは従順だった。

翌朝、博士が起きてキッチンへ行くと朝食が準備されていた。

「おはようございます」

自然なイントネーションでロボットは言う。この朝食はロボットが栄養バランスなどもちゃんと考えて作ってくれたのだろうか。それにしても、エプロン姿の自分を見るといっことは気持ちが悪かった。

「ありがとう」

博士の朝食を準備し終わると、ロボットはカップを持って倉庫へ行きドロッとした茶色の液体を並々にそそぎ戻ってきた。

「それは一体なんだね？」

「オイルです」

なるほど、さすがに機能停止になるまで働き続けるほどバカではなかったか、と博士は感心した。

ロボットが掃除も洗濯もしてくれたので、博士はする事がなくなり研究室で新しい発明に取りかかっていた。彼はこのロボットで金儲けをするつもりはなかったから、誰にもロボットを発明したこと

を教えるつもりもない。

「何かお手伝いしましょうか」

ロボットが尋ねてきた。

「もう家事は終わったのかね？」

「はい。何かお手伝いすることはないでしょうか」

博士は時計を見て言った。

「じゃあ、昼飯のおかずでも買ってきてくれないか」

「昼飯のおかず」とは、何を言えばよいのでしょうか」

このへんの機転までロボットに要求するのは無茶というものだろうか。朝食は完璧にこなしていたのに、あれは食料が既にそろっていたからできただけなのかもしれない。

「じゃあ魚でいいよ」考えて博士は付け足した。「うなぎがいい」  
「了解しました」

ロボットは博士の財布を持って出て行った。あれほど優秀ならば、買い物ぐらいできて当然だろうと博士は思っていた。しかし、ロボットは何も持たずに数分で帰ってきた。

「おい、うなぎはどうしたんだ？ 財布もないじゃないか」  
するとロボットはこう答えた。

「ナイフを持った青年に“金を渡せ”と言われましたので、渡しました。お金がなくてはどうなぎは買えません」

つまり、ロボットはカツアゲをされたらしい。だが、博士は財布をなくされて納得いかなかった。ロボットは痛みも感じないうえに、金属の体なのだから喧嘩に負けるわけがないのに。

「どうして逃げたりしなかったんだ？」

「人の命令に絶対従うこと」です」  
博士はうなだれた。

「どうやらお前には改良が必要らしい」

昼飯時がつくに過ぎた頃に、ようやくロボットに新しいデータがインプットされた。『従わなくてもいい命令もある』『暴力をふるわれたら、逃げるか戦うべし』『合理的に動け』と。さらに博士

は自分の頭脳データをそっくりそのままロボットに与えた。おかげでロボットは中身まで博士とそっくりになってしまった。

「博士。私も何か発明したいです」

途端にロボットは言った。博士は笑い出した。

「ロボットがロボットを作るのか。これは面白い。いいだろう。だが、まずはうなぎだ」

今度こそきつちりと近所の魚屋でうなぎを買ってくるだろう。きつと魚屋の主人はロボットであることも気がつかないはずだ。しかし、ロボットは一時間以上経つても帰ってこなかった。これはまたチンピラに襲われたかな、と心配になってきた頃にやっと帰ってきた。

「遅かったじゃないか。何があつたんだ？」

「隣のスーパーマーケットでうなぎが3割引でしたから、そっちへ行きました」

「だけどお前は……、私の命令は近所の魚屋で買って来い、だっただろ？」

「従わなくていい命令もある」。そして、私は合理的に動いたつもりでしたが、ちがいましたか？」

ああ、これは合理的だな。だが、もう昼飯の時間ではなかった。

博士は友人にもロボットのことを話さなかった。だがある日、親友の結婚披露宴に招待されると同時に、ちよつとした商売を依頼された。親友の招待は断れない。だが、今回の商談が成功すれば研究資金がたんまりと手に入る。

博士は悩んだ結果、披露宴にロボットを行かせることにした。アルバムの写真にロボットが写っていても、博士さえ自分だと思ってくれるから誰も気付きはしないだろうと思つてのことだった。

当日になり、博士の依頼された研究は成功して資金も約束通り受け取れた。ロボットの方が気になるが、今ここで行けば招待客たちが混乱するだけだ。落ち着かないまま博士は研究室でロボットの帰

りを待っていた。

夕方にロボットは帰ってきた。だが、一人ではなかった。博士の昔の友人たちを、さらには新郎新婦までも連れて帰ってきたのだ。

「おい！ お前すごいな。こんなロボット発明するなんてさ」

ほろ酔い状態の友人が言った。博士はロボットを睨んだ。

「なぜバラしたんだ？」

「彼らが私をいつもと違うと言ったのです。白状しろと言われたので白状しました」

「教えたらいけなかったのに！」

博士はロボットを非難した。

「そのような命令は受けていません」

ロボットのその淡々とした発言に、友人たちは笑った。だが、博士は気に入らなかった。

「そのロボットは何ができるんだ？」

「基本的には万能なはずだ」

ロボットは友人たちのリクエストに何でも応えてみせた。頭脳を共通しているので計算が得意なのは当たり前としても、博士にはとうてい出来ないアクロバティックな運動もしてみせた。その度に、拍手喝采だ。

翌日、博士はロボットに留守番させて昨日の商売相手に会いに行った。受け取った研究資金で新たな研究をどうするかを相談に行くつもりだった。だが、担当の言葉は意外だった。

「もう新しい案は受け取りましたよ。いや、非常に画期的で独創的といえますか、珍しい発想をお持ちですね」

「いつそれを？」

「つい十分前です。お電話したところ、ファックスでこれが送られてきました」

担当が見せた新案は、博士が今までに思いつきもしなかったものだった。とても難しく複雑だ。



「さすがですね。こんな難しいものを発明しようと言つのですから」

博士は家に帰ると、ロボットを怒鳴りつけた。

「勝手なことをするな！ お前は手伝いだけしてればいいんだ」

「博士は私が以前に何か発明をしたいと言つたとき、いいだろうとおっしゃいました。それに、私たちの頭脳は共通です。私が思いつくものは、博士も思いつく。そうでしょう？」

ロボットは正しかった。博士は負けを認めたくなかったから、黙って頷いた。

友達が遊びに来たときも、ロボットが人気者になっていた。誘いの電話がかかってきたときも、『ロボットいる？』が第一声のときもあった。例の新案も、ロボットに任せることにした。気がつけば、博士は必要とされなくなっていた。そして、考えた。このままだと仕事も友人も全部ロボットに奪われてしまうのではないかと。ふざけるな。そんなことは許さない！

ロボットが仕事を終え、研究室から出てきたところを、博士は鉄の棒を持ち襲った。そして、ロボットが怯んだ隙に何度も何度も殴りつけた。

「お前なんか壊れてしまえ！」

後の事は一切考えずに、博士は力一杯ロボットを殴り続けた。だが、ロボットは抵抗しなかった。

「暴力をふるわれたら、逃げるか戦うべし」ロボットは小さく呟いた。「私は逃げるを選択します」

ロボットは玄関の扉を開けて全速力で走っていった。博士は鉄の棒を投げつけた。

「二度と戻ってくるな！二度と私の前に現れるな！」

そして、ロボットが帰って来ることはなかった。『人の命令に絶対従うこと』を守り抜いたのだ。

季節が冬になると、博士は後悔するようになっていた。積もらない程度の雪が降っている大きな商店街を彼はとぼとぼと歩いていった。あの日以来、不思議なことに誰もロボットを見ていなかった。友人たちの元にも行ってないらしい。

道路は雪こそ積もっていないが、ところどころ凍結して滑る場所もあった。こけるのをさける為に、博士はずっと下を向いて歩いていたので、突然の耳をつんざくブレーキの音に驚かされた。

顔を上げると、トラックが目の前でスリップして横転しかかっている。荷台には鉄柱が高く積んであり、てっぺんの鉄柱が今にも落ちそうだった。鉄柱が落ちてくれば、真下にいる自分に当たることぐらい分かっているのに、博士は動けなかった。感覚が麻痺している。

ついにトラックは横転し、鉄柱が降り注いできた。ここでようやくハツとして、気付いたときにはもう遅い。死か、もしくは激痛が目の前に迫ってきていた。一步後ろに下がることはできたが、背中が電柱にぶつかった。もう避ける暇はない。博士は思わず目を瞑った。

すると叫び声というより雄叫びに近い声を発しながら、誰かが突進してきた。その誰かは博士を突き飛ばした。アスファルトに背中を打ち、博士は痛みを感じないことを確認すると目を開いた。

そこには博士がいた。だが、博士は彼であるから、鉄柱と電柱に挟まれ腹に穴が開いたその男は博士ではない。博士にそっくりなロボットだった。色んなものがショートし、機能を失っていくのが分かる。博士が駆け寄ると、ロボットはぐしゃりと倒れた。

「何で」

「親切にされたら恩返しをすべし」です。あなたが私を作った」  
ロボットが上げようとした腕が、妙な音を立てて地面に落ちた。

「だけど、私は命令した。『二度と私の前に現れるな』と」

ロボットは、博士の顔でにやりとした。

「従わなくていい命令もある」です」

ロボットの博士にそっくりな目から、音を立てて光が消えていった。しかし、博士にそっくりなロボットは、死んだのではない。壊れただけだ。

博士は重たいロボットの体を持ち上げて、ゆっくりと歩き始めた。

「親切にされたら恩返しをすべし」  
「そう呟いた。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8625n/>

---

そっくりなロボット

2010年10月8日11時41分発行